



古今策雅抄

廿  
大歌所





古今和歌集卷第二十

大内御歌

大内御歌。大内乃内教坊と云ふあり。是を大内  
而と云女樂并舞姫の儀と云ふ也。是を大内御  
あり。按家乃別當公の并次將を云ふ也。是を大内御  
姫と云ふ也。是を大内御の御歌と云ふ也。是を大内御  
らと云ふ也。是を大内御の御歌と云ふ也。是を大内御

おちる御ひ乃歌

大直自と云。内裏と云。此の御ひ乃を直と云。百官の宿直  
と云ふ也。是を大直自と云。大直自乃名也。帝王御  
即位乃と云。是を御ひ乃と云。是を御ひ乃と云。是を御ひ乃  
甲と云。是を御ひ乃と云。



おしひ〜大嘗会始より〜

日中地よはく〜

新〜地意の始より〜  
なつ〜  
そ〜  
わり〜  
庭敷〜  
よあ〜  
又〜  
む。神カミ敷と云又ヒコ心ココロ純スガ主ミコ奏ネと云〜  
然れ〜  
だの人〜

ひ〜  
と〜  
あ〜

大和舞と大嘗ウツクミと云よあ〜  
〜  
如の舞也〜  
〜  
〜  
〜

吉野城山よ〜  
〜  
〜  
〜  
〜





うめりれおのり。比事... 神のこむ  
 後... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 霜... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

あつた又山長くは...  
深山より霧あつし...  
是る處大乃...  
...  
事あつた...  
中...  
ありと...  
ありと...  
ありと...

みちれくのお...  
...  
あ...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...

乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...

乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...  
...  
乃中の...

神樂百目哥

いそぐりしつらに... といふめん

いほこまう約をつまぐん約ひが... 是る處に... 大嘗言よ...

とてあはれ... 大嘗言よ

とあり... 大嘗言よ... 大嘗言よ...

め乃むらと... 大嘗言よ... 大嘗言よ...



ひためといふよつとて。まじく女と扱きしれども  
を不審なり

かつーもせしき

い哥も大嘗まよあも。信るあよ約念くーと  
りつり。歌二二とらぬーもよんしーも申たなり。  
一禪寺院深氏よりりこまも。柳乃吾を信  
るふ拍子よあをさうくさうらり。神木の御子一越  
酒あふれ。信るあ拍子よあうくさうとあさくさうー  
とさうらり。乃呂さぬ調律さ平調なり。呂  
律乃るいば事よらあもやぬわくー。又あま乃上  
まよまうりあうよあも。あ乃更行まよ物の  
あさくさうらり。あ師あそひの程さ

あま下まよいりあうよあさくさうらりて律れ  
あさくさうらり。あ拍子よあうくさうらり

ま柳をくさまらりて。あ乃あてあまもむめ乃花さ  
あれやあさくさうらりて。あさくさうらりあ  
あまあ乃花さくさうらりて。あさくさうらりあ  
柳乃呂の歌なり。あまあてあ拍子よあさくさうらり  
あ乃あさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり

あさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり  
あ拍子よあさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり

あ拍子よあさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり  
あ拍子よあさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり  
あ拍子よあさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり  
あ拍子よあさくさうらり。あ拍子よあさくさうらり

後をぢりていへ。あつちをあらゆりあつちへもく  
らよきつらうにをまへん。つらうにをばしてて  
むしきつらうにあつちを。細谷川を。山乃勝  
をめぐりまねだ。昔はよ長は河流如帯  
とあり。美濃の事

大君乃みまこの山乃等あまの細谷川乃をよめやけい  
いふ。あまの事あり。事あり。事あり。平城乃御時  
尾せよ。あまの事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
とあねを。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
承和乃所へ。仁乃乃御事あり。一様所後。事あり  
御時あり。大君乃の御時。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり

物をあつちを。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
山乃。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
御中。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
大君。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり

美作やわら乃。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり  
事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり。事あり

名のちりし事ハヨウ々事ナレバ也。若作よめ  
さしやうしとらふあまを。けうくくとくを。まこと  
いひとゆる也。是ハ信る樂乃若作のちりあり  
仔細方集よ

若作やくめ乃さしやうくお昔れ妹が意くお  
け大掌とのちりをおひしりて。意のさしやう  
とおちえられあり

みれよせされち川多えはて若よはくむ方代まてこ  
これさ陽成え乃御べのまれま

美濃乃玉の岡れ若川の多えぬがどく。よらつ代と  
よ若よはく人なうんと也 持中納の袍ハ也

若よはくさりもあ〜長流乃まことのねいふつ

あれさえ考仁乃御く乃の勢のくみま

長流乃ま砂のねまみはくはくも。まら代はくさ  
乃あるゆ〜まもさりもあ〜長流といひつ  
あたり

あまのや後の山をまて〜まかひてそをゆまらちとせ  
これま今よ乃御のあまも

とに乃後山をまてまをまらちとせ乃か  
まらちと也あま乃やのの御乃字也。聖まあ〜

山を〜まらちとせのまらちとあまも。今〜  
長乃御事なり一様流。まらちと自皇帝のちり也  
まらちと流も難まをらた。あ人をまらちと

東の

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて  
みちれくま

多國乃并武あひたる也神樂乃亦あり

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

みち乃いほくいあわと塩の浦のつとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつちうしとよむびー。ちりまあそひらうやうとて

あつをそとて

塩を浦よりとりてふくむ人おるに物とて毎にゆくふくむ人  
とてあり

あせを教ふやうて塩竈乃まがたが海のまろそをりて  
女乃まがせを教ふやうてあまを海があひりてまろの  
とてまがた乃海のおよそへ海をそとてまの意  
しとて也志なが海乃海の沖は難海あり。いせ  
あり。ろそとあり

をく海にたつ乃小島の人もいれ乃法とふくむをまて  
小島海はまがた小島は法とて面白くありてむむは海乃  
人よそあつてまがたのち法とてまがたのちひき  
まがたとてあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。

あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
小島海はまがた小島は法とて面白くありてむむは海乃  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
て。人よそあつてまがたのち法とてまがたのちひき  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。

あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。

あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。  
あつとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。ろそとあり。

志もたれどあまらり。望もほ乃侵らり。雨もりとも露乃ほ  
 たりとるにあらば。毎のふねをみ乃まきおとつあが  
 ごとく。宮城形もさぬ乃く。山蔭もく露の志もた  
 とりなまらり

志もたれどあまらり。望もほ乃侵らり。雨もりとも露乃ほ  
 たりとるにあらば。毎のふねをみ乃まきおとつあが  
 ごとく。宮城形もさぬ乃く。山蔭もく露の志もた  
 とりなまらり  
 志もたれどあまらり。望もほ乃侵らり。雨もりとも露乃ほ  
 たりとるにあらば。毎のふねをみ乃まきおとつあが  
 ごとく。宮城形もさぬ乃く。山蔭もく露の志もた  
 とりなまらり

一 櫻津後あり。は音は月なりとま。と拾きかた  
 乃音ともふは音とも。をりともりとも。如何

志もたれどあまらり。望もほ乃侵らり。雨もりとも露乃ほ  
 たりとるにあらば。毎のふねをみ乃まきおとつあが  
 ごとく。宮城形もさぬ乃く。山蔭もく露の志もた  
 とりなまらり  
 志もたれどあまらり。望もほ乃侵らり。雨もりとも露乃ほ  
 たりとるにあらば。毎のふねをみ乃まきおとつあが  
 ごとく。宮城形もさぬ乃く。山蔭もく露の志もた  
 とりなまらり

時こころろあるべしとちぶね事あり。結因が  
奇松よ。本乃雲中の松末の雲とてこころまよと  
とつらさねどもや山といふも。末乃松とむらりよみ  
お新源氏よとち

浪波よ比と志とて末の雲まつらんとお心ひくる  
なみこち比の家と多事地

さがる人よ

おろぞ乃様立ちよいそまつむらびぬこと沖おれ浪  
小條後破こじょうのついでお獲よこちまはくいそまはむめ乃こころ澄  
まよ沖よおれ浪と也磯棠と海藻もこといよ浪乃  
もちやむをどあまといふおれと浪をいよ磯とちま  
らへいおちられたる也めざと一はよあまのい

おろぞ乃様立ちよいそまつむらびぬこと沖おれ浪  
小條後破こじょうのついでお獲よこちまはくいそまはむめ乃こころ澄  
まよ沖よおれ浪と也磯棠と海藻もこといよ浪乃  
もちやむをどあまといふおれと浪をいよ磯とちま  
らへいおちられたる也めざと一はよあまのい

おろぞ乃様立ちよいそまつむらびぬこと沖おれ浪  
小條後破こじょうのついでお獲よこちまはくいそまはむめ乃こころ澄  
まよ沖よおれ浪と也磯棠と海藻もこといよ浪乃  
もちやむをどあまといふおれと浪をいよ磯とちま  
らへいおちられたる也めざと一はよあまのい





くひのよきをたやうふひのよきをたやうとくひのよきをたやう  
ふたつたやの申ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
えりんげと云くわくわくふんふんふんふんふんふんふんふん  
甲斐乃玉の風信よふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
つくと信那よふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
本もあ甲しふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
去依自紀よかくてさーのぢうよ自記屋東の方よふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
古今の撰者ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
甲しふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
依那那よあ甲しふんふんふんふんふんふんふんふんふん

申ふんを長ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
後何必乃風信あり

かひのよきをたやうふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
あえふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
人よふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん

伊勢歌

甲乃浦よふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん  
おのふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん

ちりもさくばも。人々ねさくさくさくはむやと縁ひて  
 いらるる乃ちうらや。ありもちうらうらむとといもんとく  
 ありおをといひおせり。麻生浦を志摩あつる。尋宮  
 乃所産をく。おをを執さるおあり。伊勢と志戸と  
 ひとらよあり。麻生乃おやとさるや。麻生と志戸  
 乃。探麻乃麻生とづく縁也。さくさくあさる。花の探乃  
 産さう。うらと紅梅よ。麻生あり。け志摩よ。あつ麻生  
 他よあり

冬の賀茂乃まらりの奇  
 天保十一年中百目なり

若原と一由記の物語

ちりもさくばも乃社の姥少妻を代婦ともいふさうなり  
 賀茂乃産乃けじめ。結らる川よ。結らるをいもとい  
 むる也。是ハ寛平乃沖時をいひて賀茂乃源時の  
 系をい。時敏乃物たけ。おの系人よ。あちちと時よ  
 けめり。吾あり。油頭よけ吾をあめり。事一。隨の事也  
 後成にさ。おれさ。成古今第一乃奇といり。昔の  
 吾他も。いふおさるさ。古今第一といり。吾け  
 卯も。又説冬れくも。乃源時のおの。十一月中商  
 目也。寛平沖時乃さ。め。おれさ。あれを始め。結  
 る。始乃。東経の奇とてめさるなり。吾也

家ノ補院本ノカニテ事書入ノ御書滅テ今別々ニ

卷第十 物名部

ひ〜〜〜 は〜ゆれ

松ノ字々々〜 葛ノ乃ノ字々々〜

左部ノ下々々上 傍に

如ク〜 乃ノ字々々〜

さうたもの本々則下

くわのあま じゆん

あ一時と〜 かねと〜 乃の字々々〜

恐事 利貞下

なまのぬ ぬい〜

二四

なまのぬ ぬい〜

〜 流下

〜 あ〜

あゆめ

〜 乃の字々々〜

〜 あ〜

桂下

卷第十一

あ〜 乃の字々々〜

〜 乃の字々々〜

~~~~~

卷第十一

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

卷第十四

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

古今和歌集序

紀淑望

紀淑望言也  
聖之養子

夫和歌者掩其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形言是以逸者其拜樂忘者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化入倫和夫婦莫不有和奇和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之轉花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發奇音物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無和奇未作逮于素盞烏尊到出雲國始有二十一字之詠今反奇之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以和

奇通情者也爰及人代此風大興長乎短歌旋頭混本之類雜舛非一源流漸滋譬猶拂雲之樹生自寸苗之烟浮天之波起於一滴之露至如難波津之什獻天皇富緒河之篇報太子或事關神異或與入幽玄但見上古歌多存古質之格未為耳目之翫徒為教誡之端古天子每良辰美景詔侍臣預宴遊者獻和奇君臣之情由斯可見賢愚之性於是相分所以隨臣之欲擇士之才也自大津皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼麈移彼漢家之字化我日域之俗民業一改和奇漸衰然尚有先師抄本大夫者高振神妙之思獨步古今

間有山邊赤人者並和奇仙也其餘業和奇者綿々不  
絕及彼時交淺瀆人貴奢淫浮詞雲與楚流泉涌其實  
皆落其花孤榮至有好色之家以此為花鳥使之食之  
客以此為活計之媒故半為婦人之右難進大夫之前  
近代存古風者終二三人而已然長短不同論以可辨  
花山僧正尤得奇之妙然其詞花而少實如圖畫好女  
徒動人情在原中將之奇其情有餘其詞不足如姜花  
雖少彩色而有薰香文琳巧詠物然其妙近俗如買人  
之者鮮衣宇治山僧樵喜其詞花麗而首尾滯滯如望  
秋月遇曉雲小野小町之奇古衣通塔之流也然楚而

無氣力如病婦之著花粉大友黑主之奇古猿丸大夫  
之次也頗有逸真而妙甚鄙如田夫之息在前也此外  
氏姓流聞者不可勝數其大底皆以難為基不知奇之  
執者也俗人爭事榮利不用詠和予悲哉々々雖貴相  
將富餘金錢而骨未腐於古中名先滅於世上適為後  
世被知者唯和奇之人而已何者語近人耳義憤神明  
也昔平城天子詔侍長令撰万葉集自尔以來時歷  
十代教過百年之後和奇亦不被採用雖風流如野宰  
相輕情如在納言而皆以他才聞不以新道顯陛下  
御宇于今九載仁流秋津洲之外惠茂筑波山之陰

友身抄三十一  
三十一  
交為瀨之祥寂之因口砂長為巖之頌洋々滿耳思能  
既絶之風欲真之慶之為愛宿大内記紀友則御書所  
願紀貫之若甲斐少目凡河内躬恒右衛門府生壬生  
忠岑等獻家集并古來回奇曰續万葉集於是重有詔  
部類所奉之奇勤為二十卷名曰古今和奇集長等同  
少春花之艶名竊秋之夜之長況哉進恐時俗之嘲退  
慙才藝之拙適遇和奇之中真以樂音為之再唱吟半  
人丸既没和奇不在形乎一時延喜己年歲次乙丑四  
月五日 卡貫之等謹序

此集家々所稱雖說々多且任師說又加了見為備  
後學之從本不願老眼之不堪半自書之

近代僻案之好士等以書生之失錯稱有識之秘  
事可謂道之魔姓不可用之但如此用捨只可隨  
其身之取存不可存自他之尾別志同者可隨之

貞應二年七月廿二日 辛亥 戶部尚書藤判

同廿八日合讀合記書入落字早傳于嫡孫  
丁為將來之從本

本云  
此本以南家相傳之本校合之  
相傳之兩重分年一為體本之

明應寺延和月日

飛鳥井榮雅自筆真意  
從三位 左判

右に古々集之清虫一宗亂入之時任宅卷上之百段  
元火神成烟陸然大方端々覺之公古集之平以重次  
室家心僻案抄之說亦再一條禪圓御說也之身皮出  
みお大僧正良徳内々古今多有傳定之由在々無  
餘目御地界之徳為制之り子々不忌思之は為少々  
御指箇之故南家之由説同如之而々々公加也  
押付傳受之義志於 志願復也 將軍家飛鳥井 雅親御講尺之  
本在之實不為支指速水親祐抄者數年如昔之間陸  
々望固陸々懐惜強而願望之象以披由本令傳受者  
也末代之室寶昭白儀の坐位也也は集定義之要説



多之不漏一之不漏之也定之有定事也物又付本之  
表紙位支摺也是又於世有未嘗有物也昔志不月物  
聚未々摺写自麻事於為物主也跡わ之物ふ月丹  
書為常歎也付摺之復何物物語南集之意四於融  
公之誦焉るるも汝治る也々愚比丘余七十以不見之  
老眼未之落字也誤亦一読之時の重之唯是顯けら  
る二之志老筆見若後而已

永録四年二月十八日古果平

雅世 雅親 雅俊 御家系圖畧々三代記々

親祐 玉信

